

文學博士
故藤井健治郎氏肖像

急迫敗復
寧耐成事
馮一齊先生之語



故藤井健治郎博士略歴

明治五年八月八日 山形縣東田川郡狩川村大字狩川字阿古屋ニ生

ル。父ハ石川養貞母ハ春恵。父ノ實家藤井家ナ相續ス。

明治二十八年七月 第二高等學校卒業。

同 年九月 東京帝國大學文科大學入學。哲學科ノ課程ヲ修ム。

明治三十年七月十日 來學年特待生ニ選定セラル。

明治三十一年七月十日 東京帝國大學文科大學卒業。大學院入學

明治三十二年九月 元私立東京專門學校講師ヲ囑託セラル。

同 年十一月二十一日 峰千尋次女直子ト結婚。

明治三十五年一月一日 長男元一君出生。

明治三十六年四月六日 第一臨時教員養成所國語漢文科講師ヲ囑託セラル。

託セラル。

明治三十七年三月三十一日 第一臨時教員養成所國語漢文科講師ヲ囑託ヲ解カル。

託セラル。

同 年四月十五日 第二臨時教員養成所教育ニ關スル授業ヲ囑託セラル。

託セラル。

同 年六月二十二日 次男新君出生。

同 年十一月三日 第二臨時教員養成所國語漢文科講師ヲ囑託セラル。

明治三十八年九月十八日 第一臨時教員養成所國語漢文科講師ヲ囑託ヲ解カル。

託ヲ解カル。

同 年同月同日 願ニ依リ第二臨時教員養成所囑託ヲ解カル。

同 年十一月 私立早稻田大學留學生トシテ獨逸國ヘ留學。

同國ミュンヘン大學ヘ本科生トシテ入學倫理學ヲ專攻ス。

學ヲ專攻ス。

明治三十九年十一月 獨逸國ベルリン大學ヘ本科生トシテ轉學ス

明治四十年 十月 留學滿期ニツキ歸朝。私立早稻田大學ニ於テ倫理學ノ授業擔任。

倫理學ノ授業擔任。

明治四十一年七月二十日 三男徳也君出生。

同 年十月十三日 東京高等師範學校哲學科講師ヲ囑託セラル。

明治四十二年四月二十八日 東京外國語學校講師ヲ囑託セラル。

同 年七月三十一日 東京帝國大學文科大學講師ヲ囑託セラル。

明治四十三年七月十日 東京帝國大學文科大學講師ヲ囑託ヲ解カル

同 年七月三十一日 東京帝國大學文科大學講師ヲ囑託セラル。

明治四十四年五月十七日 四男利重君出生。

大正二年一月十九日 長女綱子嬢出生。

同 年六月二十八日 教員檢定委員會臨時委員被仰付。

同 年八月十三日 任京都帝國大學文科大學教授。倫理學講座擔任ヲ命セラル。叙高等官六等。

任ヲ命セラル。叙高等官六等。

同 年十月十日 叙正七位。

同 年十二月二十六日 文學博士ノ學位ヲ受ク。

大正三年八月十日 京都高等工藝學校講師ヲ囑託セラル。

同 年九月十六日 五男省吾君出生。
 大正四年九月七日 陞叙高等官五等。
 年十月一日 叙從六位。
 大正五年五月十六日 六男健六君出生。
 大正六年九月二十七日 陞叙高等官四等。
 同 年十月二十日 叙正六位。
 大正七年二月二十八日 次女稚子嬢出生。
 大正八年四月一日 官制改正ニ付辭令ヲ用ヒズ京都帝國大學教授
 ニ移リ文學部勤務トナル。
 同 年十月二十二日 陞叙高等官三等。
 同 年十二月十日 叙從五位。
 大正十年四月一日 佛教大學講師ヲ囑託セラル。
 同 年同月八日 七男七郎君出生。
 同 年五月二十六日 教育學教授法講座分擔ヲ命セラル。
 同 年七月十四日 文部省主催師範學校中學校 高等女學校教員等
 講習會講師ヲ囑託セラル。
 同 年十一月八日 陞叙高等官二等。
 同 年十二月十日 叙正五位。
 大正十一年七月二十四日 教育學教授法講座分擔ヲ免セラル。
 同 年七月三十一日 京都帝國大學評議員ヲ命セラル。
 大正十三年三月二十九日 亞米利加合衆國英領 加奈陀へ出張ヲ命
 セラル。
 同 年十月二十四日 叙勳四等授瑞寶章。

同 年十二月二十二日 歸朝ス。
 大正十四年四月二十五日 社會學講座分擔ヲ命セラル。
 昭和二年二月一日 叙從四位。
 同 年三月八日 陞叙高等官一等。
 同 年五月六日 叙勳三等授瑞寶章。
 昭和四年四月一日 補京都帝國大學文學部長。
 同 年六月十九日 高等試驗臨時委員被仰付。
 昭和五年一月二十五日 高等試驗臨時委員被免。
 同 年五月十六日 高等試驗臨時委員被仰付。
 同 年十月七日 依願京都帝國大學文學部長ヲ免セラル。
 昭和六年一月十五日 叙正四位。
 同 年同月同日 授旭日中綬章。
 同 年同月同日 逝去。享年六十。
 同 年同月十七日 特旨ヲ以テ位一級追陞セラル。
 同 年同月十八日 京都市岡崎町東本願寺岡崎別院ニ於テ告別式
 舉行。
 同 年二月二十二日 洛東黒谷ニ納骨。

故藤井健治郎博士著書

論文其他

一、著書及翻譯

主觀道德學要旨(明治四十三年初版)

同	六	教育學術界	平民生活	同	夏	最近思潮教育 夏季講習錄 (雜誌小學校)	家族制度の倫理
同	一〇	丁西倫理	ソークラテースの使命	同	一〇	以降 藝文	社會現象としての道德
同	一	早稻田學報	人格と社會	同	二	丁西倫理	英獨思想の特徴を論ず
四二	一	教育學術界	今後の德育の方針	同	五	日本社會學 院年報	唯物史觀の要訣及それについての考 察
四二	二	同	宗教と教育	同	一〇	丁西倫理	平等の諸意義について
同	三	哲學雜誌	懷疑と權威	同	一	哲學雜誌	正義觀念の發達に就いて
同	一八	教育學術界	道德的生活に於ける自我の位置	同	四	丁西倫理	中學校の修身科に就いて
四四	二	哲學雜誌	宮本學士の批評に答ふ 敬を論ず	同	四	丁西倫理	立憲思想の根本義及びその現代との 關係
同	三	同		同	六	史 林	唯物史觀と歴史法
同	五	教育學術界	輕蔑せられたる倫理學及び倫理學者	同	一	藝 文	正義觀念の變遷
同	八	丁西倫理	生存競争と道德	同	三	哲學研究	所謂民事責任の倫理的考察
四五	一	教育學術界	道德上の懷疑說	同	三	哲學研究	倫理上の見地より見たる所謂社會防 衛說
同	二	哲學雜誌	價值	同	三	丁西倫理	民族國家武斷國家文化國家
同	五	教育學術界	正義觀念の變遷に就いて	同	六	太 陽	戰争の倫理觀
同	八七	哲學雜誌	人格と道德	同	八	丁西倫理	國民道德の意義及其倫理學との關係
大正元	九八	丁西倫理	加藤博士著「自然と倫理」の批評	同	九	哲學研究	平等觀個人主義(平民主義)と差別觀 個人主義(貴族主義)
同	九	宗教の日本	教育家と宗教家の職分範圍	同	一	同	社會的正義に就て
同	二	丁西倫理	愛國心の要素	同	七	同	國民道德と自由思想
同	八	同	現代産業組織の道德觀	同	一	同	
三	一	東亞之光	ソークラテースのダイモニオン	同	七	同	
同	二	太 陽	現代の特徴を論ず	同	一	同	
同	三	丁西倫理	倫理問題としての都市問題	同	七	同	

寄贈圖書

メデイクス著
フイヒテの生涯と哲學
佐藤秀堂譯

理想社出版部
定價貳圓參拾錢

- 一五 中外日報 黎明期に際して
- 二〇 大阪毎日 學術上から大正の回顧
- 三〇 九州日々新聞 思想研究の方針
- 同 東西倫理に於ける一の一致點に就て
- 五八 大阪毎日 消費節約の眞諦
- (不詳) 同 京都市の心理及倫理と都市計畫
- (同) 京都市出新聞統一米國の創造

寄贈雜誌新聞

理想	昭和六年三月	五ノ二
丁西倫理會講演集	同 三月	三四一
大東	同 三月	二六ノ三
信濃教育	同 三月	五三三
生理學研究	同 三月	八ノ三
社會學徒	同 三月	五ノ三
教育問題研究	同 三月	五七
願慧	同 二月	十ノ二
帝國大學新聞	昭和六年三月十六日	